障害児の「きょうだい」への支援の本質的な視点とは

３才の障害児（Ｎ）の母親のブログに、「きょうだいへのフォローが大切だということを書きたかったのです。」との記事が目に止まった。

記事の概要は、「小学３年生の Ｓ（姉）はよく気がついてお手伝いや Ｎ（弟）の世話を進んでやってくれる、とにかく私の子としては出来過ぎなのですが（笑）、その反面、私にべったりのＮの姿を見ていて多分ストレスも溜まっていると思うんです。

よくＮがひとりで遊んでいる時に膝に乗ってきたり『抱っこして～』と言いますから、そういう時はもちろん対応していますが、それ以上に必要なことは親を独占できる日を作ってあげることじゃないかと以前から思っていて、」、月に１回土、日のどちらかに Ｎを余暇支援施設に１日預けて、Ｓを好きなところに連れて行ったり一緒に遊んだりして、両親独占と日頃のストレス発散に心懸けているとか。

「余暇利用は実費だが、お金には代えられない大事な時間がもてる。」と云う。

「今日、Ｓの希望でお台場に行ってきました。

楽しかったというよりも何よりも、希望の場所についた時の歓声と笑顔が忘れられません。」と云い、もっとＳにも時間をかけてあげたいが難しい現実があって、「そういう家に生まれた以上それを受け止めて生きていってほしい。それでも親としてはできる限りのことはしてあげたい。」と記している。

確かに、障害児のきょうだい（兄弟、姉妹）は、年少であればなおのこと、日頃親に甘えたい気持ちを辛抱することが多いかと思う。

子ども一人一人は、親を独占したい気持ちを持っているだけに、この母親のような配慮は必要かと思う。

きょうだいであっても、やはり一人の子ども。

親に十分甘え、親の目が自分にも向いていると実感することって、とっても大切なことですよね。

自分の心の居場所が意識できてこそ、家族としての意識も育まれますよね。

障害児のきょうだいを支援するＮＰＯやボランティア活動、更に、親の会の取り組みも耳にする昨今だが、ボランティア等に直接支援して貰った満足と、親を求める気持ちとは質的に異なると思う。

特に年少の頃は親に甘えられる時間確保のために、障害児を親と十二分に連携し配慮の上でお預かりして、きょうだいが親と自由な時間を過ごしてもらえるように、きょうだい一人一人の気持ちの視点からの支援内容の充実に、更に取り組んで欲しいものである。

阿部幸泰　　（2007 年 6 月 14 日　記）